

もう一つの意味形態

「第四意味形態」の位置づけ

内堀 大地

§1 はじめに

関口存男の意味形態論はその難解さに加え、網羅的な解説がなされていないことから、これまで多くの研究者の頭を悩ませてきた。本稿は中でも「三種の意味形態」に代表される意味形態の分類に着目し、それぞれの棲み分けについて検討を加える。

関口はその主著『冠詞』第一巻の中で意味形態を三種に分類している。同書で主に論じられ、その理論の中心に位置するのは第二意味形態であり、『ドイツ語学研究』誌上でも多くの研究成果が発表されてきた。

関口自身が提示した「三種の意味形態」について詳細に検討した有田（1998, 1999）は関口の記述を詳細に読みこむことで、明言されている三種の意味形態のほかに、四種目の意味形態（「第四意味形態」）がある可能性を指摘した。

しかし、肝心の「第四意味形態」の位置づけについては有田自身ですら判断に揺れがあり、他の三種の意味形態とのかかわりについては不明確なままである。本稿では「第四意味形態」を明らかにするため、他の三種との位置づけについて再検討を行う。そのためにまず関口の述べた「三種の意味形態」について概観し、さらに有田の「第四意味形態」の考え方を巡る議論を追う。そのうえで関口自身の記述を見直し、「第四意味形態」というものの位置づけを再検討する。

§2. 三種の意味形態を巡る議論

意味形態については関口自身が三種あると明言している（関口 1972 S.28）。

以下ではまず三種の意味形態の概観し、関口の考え方を整理する。

§ 2.1 三種の意味形態

関口 (1972 S.28, 1972 S.799) が言及している三種の意味形態については、これまでも何人かによって説明がなされている。有田 (1998) に書かれているものが意味形態の定義としては「一番明快である」としている真鍋 (1993) や、「この問題について (中略) もっとも詳細に取り上げている」とする山下 (2004), そして「最初, この説を疑っていた」が最終的には「やはり氏の説が正しかったことを認めざるをえないし, それが正しいことをほぼ証明することができる」とした寺門 (1999) らが見方を検討しているが, 異論は出ていない。よって本稿では有田 (1998) を中心に, その前編とみなせる有田 (1997) および続編ともいえる有田 (1999) に沿って三種の意味形態を概観していく。

有田 (1997, 1998) は関口の提唱した意味形態「第 1—機構範疇 第 2—思惟形態 第 3—構造」をそれぞれ「第 1—規定関係 第 2—意味類型 (意味範疇) (または意味のパターンあるいは意味のカテゴリ—) 第 3—構造分析」と言い換えて説明している。

§ 2.1.1 第一意味形態

第一意味形態は『冠詞 第一巻 定冠詞篇』で主に扱われている, 冠詞と名詞にみられるような規定関係のことである。関口自身も「規定関係 (即ち, いずれがいずれを規定するか, という関係) は一つの重要な意味形態」(関口 1972 S.70) とその重要性を指摘している。しかし, 最も普通に用いられるのは第一意味形態ではなく第二意味形態である (関口 1972 S.28)。普通に用いられるものではないにもかかわらず第一とされた理由として, 有田 (1997) は, 冠詞の問題はそもそも名詞に対する規定関係から生じていることと, 三種のうち最も早く成立した意味形態であることの, 二つを指摘している。

「Buch なら Buch という名詞をいう場合に, そういう規定・限定があるぞということを単語の形で暗示するのが der, das, die」(有田 1997 S.46) であり, こうした定冠詞で表わされない場合もある点については「明示されることもあり, されないこともある。要するに規定関係は可視的 (sichtbar) ではない」(有田 1997 S.47) とした。

この意味形態は、関口自身の例を引くと、定冠詞の説明で用いている三つの用法が分かりやすい。

1. 指示力なき指示詞としての定冠詞

Ich kenne den Mann seit langem.

私はその男をずっと以前から知っています。

このような文章に出てくる **den** は上記のように指示詞として訳すしかない。意味の上からは一見して **diesen Mann** と指示冠詞を用いてもよさそうなどころであるが、「指す」機能を有する指示冠詞と「受ける」機能を有する定冠詞の違いから、厳密な使い分けが行われる。分かりやすく言うと、指示冠詞は「まだ既知とは前提できない」場合に用いるが、定冠詞は「既知と前提されてよしい」ときに用いる。

der Mann であれば、これまでその男が話題になっており、その男のことを知っている者同士で話している情景が想定される。一方、ここに **dieser** を用いた場合、たとえば、ある者が新聞を読んでいて、記事に載っている容疑者の写真を見たとき、別の者に「この男をずっと前から知っている！」と伝えるような場面が想定される。

2. 通念の定冠詞

Der Arzt hat es mir verboten.

医者にいけないと言われた。

Der Arzt はすでに話題になったわけでもないから、「ご存じの医者」でもなければ「問題の医者」でもない。この場合の **Der** は「医者と言えばそれでわかる！」ということを示すと考えるしかない。こうした、後に続くものをすでに知られたもの（通念）として取り扱うことを示す定冠詞のことを、関口は「通念の定冠詞」と呼んだ。

3. 形式的定冠詞

このほかに形式的定冠詞があるが、これは慣習的ないしは格を示すために用

いられるものであり、冠詞が本来持っていた「名詞の概念性」を明示する機能を失ったものである。この説明から分かる通り、これは何ら意味に関わるものではない。有田（1999）も「規定の角度では除外してよい」（有田 1999 S.4）としている。

§ 2.1.2.第二意味形態

第二意味形態は上述の通り、もっともふつうに用いるもの（関口 1972 S.28, 関口 1972 S.313）である。「その時々“意味”の如何にかかわらず、判で捺したように頭の中であらかじめ決まってしまうて、色々な“意味”を否でも応でも其の型に押し込めなければ承知しないものがある。これを意味形態と謂う」（関口 1973a S.445）。日本語の“様な”，“なんぞ”，ドイツ語の *solch, solch ein* は「自己比較によって質の含みを効かす指示法」という意味形態（関口 1973a S.475）であり、同様に“点なら”，“女なら”および *Ein Punkt, Ein Weib* は仮構性という意味形態を有している（関口 1973a S.547）。

まさにこの考え方に基づいて書かれたのが、『接続法の詳細』や『独作文教程』である。

有田（1998）も第二意味形態については「個々の語・句・文の意味が帯びる型、それぞれの意味が収まるべきワク」（有田 1998 S.50）であり、「意味類型は共通するものを「型」として取り出す、つまり分類だ。「クラス分け」（*klassifizieren*）といってもいい」（有田 1998 S.51）と述べている。

§ 2.1.3.第三意味形態

この意味形態を関口自身は「*innere Sprachform* すなわち“直接に、分解的に意味するところ”」（関口 1973a S.322）と説明しており、また「*意像*」（関口 1972 S.799）とも言い換えている。ドイツ語では *Innere Sprachform*（関口 1972 S.313, 関口 1973a S.133, 関口 1973a S.187, 関口 1973b S.219）としている一方で *Innere Sprache*（関口 1972 S.28, 関口 1972 S.822）とも書かれていることから、表記に揺れがある。

この意味形態の例を示すと、以下のとおりとなる。

独

der Ordnung halber : “きまりをつけるために” (意像 : 秩序を考慮して) (関口 1972 S.807)

英

Without hesitation : “気軽に” (意像 : ためらいなしに)

目

まぶた (意像 : 目+蓋), 明太子 (意像 : めんたい (スケトウダラ) +子)

有田 (1998) はこれを「生きた語感を離れた意識的な操作」(有田 1998 S.57) であるとし、語感の解明を目指した関口があえてこの意味形態を設定した目的については「实际的・実用的」な (語学教室での教授のための) 配慮のためであったと説明している。

§ 3. 第四意味形態

有田 (1998) はその論稿で、関口が『冠詞』やその他の著作で明言した三種の意味形態の枠に収まりきれない意味形態があり、それは「第3でないことは100%間違いない。第2でもおそらくないだろう。やや近いと思われるのは第1だが、第1はもう少し言語表現に即しているから、やはり別だろう」(有田 1998 S.63) と述べて、第四の意味形態の存在を指摘した。以下にその論の概略を紹介する。

関口自身が明言していない第四意味形態については、関口自身が熱心に説いている名詞の場合を例にとり、関口の言語哲学ともいえるような発想のしかたがそれに該当するとしている。

言語そのものの本質は“事”であるのに、名詞はこの本質に叛いて“物”なのである。しかもその“物”性には大抵の場合多かれ少なかれ無理がある。(関口 1973a S. 185)

達意眼目は必ず「事」型の意味形態であって、「物」型や「者」型ではない; 文章そのものもやはり必ず「事」型である。文章を構成する各品詞も、

名詞の一部 (Bruder, Katze, Baum, Bleistift, usw.) だけを例外として、他は動詞にせよ前置詞にせよ助詞にせよ、すべて「事」型である；かるが故に言語も文法も 99 パーセントまでは「事」に関する現象である。(関口 1973a S. 521)

以上を含む 7 つ関口の文章を引用し、有田自身はその考え方を以下のようにまとめている。

(1) そもそも言語は達意現象である。すなわち人から人へなにごとかかを伝えるのが言語の本質だ。

(2) この達意とは「こと」を伝えるのであって「もの」を伝えるのではない。

(中略)

(6) 以上のように名詞は「こと」も「もの」も、ともに「もの」であるかのごとく見なす考え方であり、この考え方を意味形態と呼んだのだ。(有田 1998 S.62-63)

以上のような議論を踏まえて、これらを「意味形態」という同じ用語で呼んだことについては「言語固有の考え方」という観点から統一理解は可能であるとした。

§ 4. 第四意味形態の位置づけ

第四意味形態を関口のいう 3 分類に加えるとした場合、いずれかにきれいに収まる意味形態でないゆえに、有田自身でも揺れがみられる。

有田 (1998) では「やや近いとおもわれるのは第 1 だが、第 1 はもう少し言語表現に即しているから、やはり別だろう」(有田 1998 S.63) としているが、後年、再検討を行った際には「第 3 意味形態ではありえないし、第 1 の規定関係でないことも明らかである。(中略) 第 2 に入れるしかないが、それは無理であるとおもう」(有田 1999 S.5) とし、第一意味形態に近いものからどこにも入らないものへと位置づけを変えている。

この有田の意見の変化を考えるにあたっては、第四意味形態の対象の違いに

ついて考慮せねばならない。有田（1998）では「名詞の場合が熱心に説かれており、面白くもあるので、これを僕は「第4」と命名した」（有田 1998 S.61）とあることから、「第四意味形態＝名詞という意味形態」という前提のもとで分析を行い、結論を出している。一方、有田（1999）では第四意味形態に名詞のみならず、通念、考え方、概念、前置詞、評辞、挙形なども含めて議論している。そのうえで、最も普通に用いられる第二意味形態については、『冠詞』より前にも紹介がなされていたこと、一方で『冠詞』の巻頭付近では、（中略）筆者が「第4」と名づける意味形態は出てこない」（有田 1999 S.5）こと、よく出てくるのは「通念」以降、とりわけ『不定冠詞篇』および『無冠詞篇』であることを指摘し、関口の著作における意味形態の年代的な成立順を踏まえて、「第4」を「第2」の中に解消することはできないとおもう」（有田 1999 S.6）と結論付けた。

しかし、関口の著作を入念に読むと、有田の説への反証が見いだせる。関口が名詞や前置詞を意味形態だと述べている箇所について、有田（1998）は以下の部分を参照している（有田 1998 S.65）。

此の篇に於て指摘しようとする名詞の意味形態は（後略）（関口 1972 S.394）

また上に挙げた例のように、前置詞そのものの意味形態が原則として無冠詞を要求するという筋路もある。（関口 1973b S.83）

これらの前置詞の意味形態の各特殊亜種を全部指摘するということは、限りある本書の枠内においては到底実施不可能であるから（後略）（関口 1973b S.83）（上記例文三つとも下線部筆者）

しかし、同様の言い回しは『冠詞 第一巻 定冠詞篇』の巻頭にも、『冠詞』より前の業績にも出ている。

少しでも名詞というものの意味形態について感じのある人ならば当然認めなければならない一般的な筋路であることを証明するために（後

略) (関口 1972 S.5)

こういう風な, *dieser*, *solcher* の次に置かれる名詞の二種類の意味形態の差 (後略) (関口 1972 S.7)

前置詞研究は、動詞の前置詞支配なる現象をば、逆に、前置詞の意味形態を明確に把握することによつてだんだんと系統付けて始めて眞の研究たり得るのです。(関口 1977 S.60)

前置詞なんでものの細かい意味形態は、熟語や成句をなすものにも現れるが (後略) (関口 1977 S.64) (上記例文四つとも下線部筆者)

そのため、関口の著作における意味形態の年代的な成立過程を踏まえて、第四意味形態が第二意味形態に入らないと結論付けるのは性急であると考えられる。

名詞、通念、考え方、概念、前置詞、評辞、挙形のうち、通念、考え方、概念、評辞、挙形はすべて語の取り扱い方 (語局) に関わることから第二意味形態に近いものとして位置付けることができ、名詞と前置詞は品詞の名称であり、他の品詞と対照することが案に前提とされており、必然的に他の品詞との関わり方が問題となって来ることから、第一意味形態に近いものと位置づけることができるだろう。

有田の指摘した第四意味形態が第三意味形態に分類されないことは確実だが、第一か第二のどちらに分類されるかを検討し始めると、明確に分けられるものでないことが明らかになって来る。そうした、いわば「中間地点」にあることから、あるものは第一に近く、また別のもは第二に近いと言ったような状況になり、第四意味形態としてどちらの意味形態に近いと断言することは非常に困難である。

ここで参考となるのが寺門 (1999) の考え方である。寺門は有田 (1998) に言及しながら、関口が用いてきた「意味形態」という語が抱える矛盾を「3種の意味形態」論で解消しようとしたものの成功しなかったと指摘し、それゆえに「意味形態を理解するためには「3種の意味形態」論から検討する必要

があるという意見には反対である」(寺門 1999 S.39) とそもそも三種の意味形態そのものへの疑問を呈した。

確かに寺門(1999)の指摘する通り、大事なことは何度でも繰り返す関口において、三種の意味形態については数回しか言及されていない。ことほどさように三種という分類は重要視されてなかったともいえる。また、関口は規定については「単に次の三種の意味形態のみが問題になって来る」(関口 1972 S.30) と書いているにもかかわらず、意味形態論の総論として「意味形態には三種しかない」や「すべての意味形態は三種に分類できる」とは一言も述べていない。

以上のことから、三種の意味形態は意味形態論の中で注目すべき三つの柱、というニュアンスのものであって、三つのうちに入りきらない意味形態の存在を排除するものではないと考えられる。そもそも関口にとっては意味形態論という、従来の形式文法とは違う理論の構築が目標であった。それに比べると三種の分類はさほど重視されない付随的な問題であり、それゆえに三種に分類しきれない意味形態も(第四意味形態として)現れるのだと考えられる。

§5.終わりに

関口の生涯のテーマは意味形態論という独自の文法理論の探求であったことはたびたび指摘されている(関口 1977, 中村 1989)。残された業績から学ぶしかない我々としては関口の構築しかけていた意味形態論の理解を進める必要があるだろう。一方で、寺門(1999)の指摘する通り、それを作業仮説と見なし、そこから関口の語感を追体験し、読者に最も伝えたかったドイツ人の語感への肉薄を試みるのも一つのスタンスであろう。

有田をはじめとする先人は、それこそ1ページ1ページ手と目で文字を追って、大著の中に埋もれる関口の考えを拾い上げてきた。その熱意と根気に畏敬の念を表す。翻って著者は今回、『冠詞』の中で用いられている用例をOCRによって電子化されたテキストから検索をして確認した。テクノロジーの進歩に伴って文書の電子化が容易になるとともに、関口の没後50年を経過して著作権も消滅した現代にこそ、散逸している業績の電子化および公開を行い、関口の考えをさらに深く検討する環境が整ったと言える。今後は著作物の電子化や未公開資料の公開など、研究環境のさらなる充実を期待したい。

参考文献（初版年は[]内に記載）

有田潤

- 1997[1985] 『ドイツ語学講座 I』 南江堂。
 1998[1987] 『ドイツ語学講座 II』 外語研究社。
 1999 「3種の意味形態」, 冠詞研究会編（1999）『ドイツ語学
 研究』 S.1-9。

細谷行輝

- 2006 「意味形態論的見地より見た言語本質観」, 高岡幸一教授
 退職記念論文集刊行会編（2006）『シユンポシオン ー高
 岡幸一教授退職記念論文集ー』 S.43-52。

真鍋良一

- 1993 「冠詞雑話（5）」, 冠詞研究会編（1993）『ドイツ語学研
 究』 S.2-5。

中村英雄

- 1989 「関口存男の横顔」, 中村英雄（1989）『池上草堂襍記』
 角川書店 S.348-363。

関口存男

- 1954 『ドイツ語学講話 第一輯』 三修社。
 1960[1953] 『獨作文教程』 三修社。
 1972[1960] 『冠詞・第一巻・定冠詞篇』 三修社。
 1973a[1961] 『冠詞・第二巻・不定冠詞篇』 三修社。
 1973b[1961] 『冠詞・第三巻・無冠詞篇』 三修社。
 1977 『意味形態を中心とするドイツ語前置詞の研究』 三修社。

寺門伸

- 1999 「言語研究方法論としての意味形態論 ー関口存男がめ
 ざしたものー」, 冠詞研究会編『ドイツ語学研究』 S.11-52。

山下仁

- 2004 「ドイツ語教育における言語ゲームと意味形態」, 冠詞研
 究会編『ドイツ語学研究』 S.51-67。